子どもが“Change”を実感できる授業作りと題材設定

～体験の言語化を意識して～

藤原　ゆうこ　・　神山　求実

総合の学習の中で、子どもたちが自分や仲間の変容“Change”を実感できる学びを創っていくためにはどのような対象を設定し、題材の流れをつくり、手立てを行うことが効果的なのだろうか。

今回は、自分たちが総合の時間に身につけたい力を決め、それをもとに振り返りシートを作成し、自己評価を積み重ねていくことで自己の変容を実感することにした。そのシートを活用し、“ほんまもん体験”からの気付きより言葉にこだわりをもたせることにした。言葉にこだわることが、自分の意識をより明確にさせ、学びが深まると考えるからである。また、学び合いが高まり、自分や仲間の“Change”実感できるのではないかと考え、視点（立場）を明確化することも意識して、取り組んだ。

キーワード：Change（変容）、体験の言語化、視点、地産地消、わかやまもん、

１．子どもが“Change”を実感できる学びとは

総合の学習では自身がどのような目的意識をもって追究していくのかを明確にしておくことは不可欠である。そして、目的意識を持って学んでいく中で自分にどのような力がついたのか、自分の変容だけでなく仲間の変容も実感できるような学びを創っていきたい。そして、自分たちの学びが社会生活の中で生かされていたり、貢献できていることを実感できれば自分たちの学びに対する自信ともなるだろう。

その変容の意識の積み重ねこそが学びの質の高まりであると捉え、“子どもがChangeを実感できる学び”をテーマとして設定した。

２．研究方法

本研究は、総合の学習で大切にしている本物やそれに携わる人との出会い等の体験的活動“ほんまもん体験”を題材のどこに位置づけるのかに加えて体験の『言語化』を意識しながら取り組んだ。言葉にこだわって学びを展開していくことで、子どもたちの意識が明確化していくのではないかと考えた。

１年間の学習をスタートさせるにあたり、具体的にどんなことを学んでいきたいのか、その学びで自分たちの身につけたい力は何なのかを話し合うことにした。そして、授業後に自分や仲間の変容“Change”をCHANGE振り返りシートに記録していくことで学びの足跡を残していくことにした。子どもたちとの話し合いの結果、つけたい力を次の４つとした。

① 聞く力・・自分の考えと比較しながら聞く
② 考える力・・本時の課題をよりよくしようと考える力
③ 表現する力・・自分の考えをみんなに伝える力
④ 課題を設定する力・・学習の中から疑問やもっと知りたいことを見つける力

２．１．振り返りシートの活用

CHANGEの学習では，五感を大切に直接体験，“ほんまもん体験”を取り入れることを大切にしている。子ども自身が実際に体験することにより学びを本物にしてほしい、体験からの気付きを大切にしてほしいというねがいからである。

本単元では，自分たちの体験的な活動も含めて，言語化しながら学びを確認したり振り返ったり、自分のChangeを実感させていきたいと考える。そのため，授業後には年度初めに自分たちで話し合って決めた「つけたい力」の変容を振り返りシートに自分の言葉で記入し，次への課題を見つけていくという取り組みを行った。

また，自分が感じたことやわかったことを具体的に言語化し，仲間へ伝えての共有化をはかっていくという機会を授業の中で大切にした。そのためグループ活動を重視する。『グループ→全体』という学習の場を設定することで，みんなが参加できる言語化活動の場を保障できると共に，それぞれの子どもへのみとりと適切な支援がより可能になると考えた。

２．２．栄養教諭との連携

子どもたちにとって共通の食といえば学校給食である。栄養バランスだけでなく，日本の伝統的な行事食，旬の食べ物，地産地消，作り手の思いなど，大切なエキスがつまっている。この学校給食を生きた教材として活用していきたい。本題材でも子どもたちが考えた献立のメニュー化，給食通信とのタイアップ等をはかり，栄養教諭との連携を重視した。

子どもたちにとって栄養教諭は自分たちの健康を食の面から温かく見守り，支えてくれているという存だ。本校の子どもたちはそんな栄養教諭に

親しみを感じ慕っている。栄養教諭は授業の中でアンサーマン的な位置づけだけではなく，一緒に学んでいく，よりよいものを探究していく存在，共に授業を創るパートナーである。

２．３．視点の明確化をはかる
～地域に根付いた活動を通して～

子どもたちは学んでいく中で，たくさんの情報に出会うこととなるだろうと予想される。そんな情報の一部を安易に受け入れたりそれが真実だと考えてしまうことがよくある。特に、インターネットを通じての調べ学習は、そのような傾向が見られる。物事にはいろいろな見方，考え方があり，視点によっても違いがあるということ，たくさんの情報の中から判断して、考え、結論を出すのは自分自身であることを実感させたい。

そのため，本題材は地域に根付いたものを中心において子どもたちが活動できる物とし、調べ学習を行ったり，インタビュー活動を取り入れる時，自分の視点（生産者，消費者、販売者等）を明らかにしながら取り組んだ。それぞれの立場の人の思い，利益などを現実的に受け止め，学級で交流し合い，話し合い活動をすすめていくことで自分の考えを明確にしていってほしいというねがいからである。また、話し合いの中で、視点が明確にされていないことから起こってしまいがちな混乱を防ぎ、真剣味のある話し合いにしたいという思いからである。いろいろな角度から１つのものごとを考えていくことで，多角的なものの見方・考え方を育んでいきたいと考えた。

３．わかやま大好きっ子☆大集合！
～わかやまもんのステキを発見しよう～

３．１．題材設定について

４月より４年Ｂ組では，和歌山が果樹王国であることに着目し，果物を通してわかやまのよさをさぐり，身近な人々にひろげていこうとするPR活動を子どもたちと行った。

実際には自分たちがあまり知らなかった「下津のびわ」農家の方との出会いを通して、学校給食へのメニュー化、附属っ子へのPR活動を行い、残食が大幅にダウンするといううれしい附属っ子のChangeを目にすることができた。

CHANGE振り返りシートからは、自分たちのはたらきかけが周りの仲間や農家の人たちにも喜んでもらえたんだという驚きや喜びの声が感じらると共に、「何かができる自分」への気付きにもつながっているようであった。また，「食と健康」に関わって，養護教諭にも授業を行っていただき，子どもたちが「健康」を意識していくいいきっかけとなったと考えている。そんな活動を展開していく中で，自分たちの学校がある和歌山県の気候風土にふれ，いろいろな人たちと出会い，果物の魅力再発見していくことができた。

秋といえば，“旬”の食べ物が世間的にも意識され，和歌山で有名な果物ではみかんや柿が実る季節である。そこで，子どもたちと“旬”の食べ物のよさについて学んでいくことから本単元をスタートさせ，子どもたちが〈地元わかやま産の食べ物（わかやまもん）〉のよさを実感し，郷土への愛情を育んでいけるようにというねがいをもって本単元を設定した。

３．２．題材の流れと子どもの学び～わかやま大好きっ子☆大集合！～（全２２時間）

第1次　秋の“旬”さがしをしよう(2)

“旬”の食べ物についての学習を給食メニューからスタート。１日平均２～３個ずつ使われていることが分かった。本校の給食メニューには毎日必ず栄養教諭のその日のテーマ（こだわり）のコメントがのせられている。子どもたちは、給食メニュー１つでも、じっくりと見てみると、いろいろなことが発見できることに気付いた。

ある日の給食メニュー「ごはん・筑前煮・さんまの蒲焼き・梅干し・牛乳」を見つけると「この梅干しは、絶対に和歌山産やで！」という声。教師から「じゃあ、他の食材は？」と投げかけてみると一瞬静まりかえった。毎日いただいている給食の食材がどこの物なのかを知らなかった自分たちに気付き、食材の産地調べがはじまった。

第2次　4B秋カレー作りにチャレンジ(4)

それぞれが子ども栄養士さんになったつもりで、「秋カレー」作りにチャレンジ。食材は５種類までと上限を決めどんな秋のものを使うのか、隠し味等、グループごとに話し合って考えた。そして実際に自分たちで近隣のスーパーに出向き、何を基準に選ぶのかを意識しながら買い物を楽しんだ。ここでは、食材の品質、値段、産地等にこだわりながらもおいしいものを、体にいいものをとこだわるこどもたちの姿が見られた。

栄養教諭には、カレーの上に小松菜や柿、梅の天ぷらをのせた和歌山産へのこだわり「和歌山秋カレー」を作っていただき、子どもたちに紹介してもらった。

子どもたちと自分たちが作った秋カレーの食材を元にして、フードマイレージ調査も行った。今回は、正式なものではないが、子どもたちには「食べ物の旅」と説明、日本地図の和歌山県から定規で何㎝離れているかで、ポイントを計算していった。互いのポイントを競い合うような場面も見られ、どのグループも８０～１００ポイント程度となった。発表した後、栄養教諭のポイントがたった６ポイントであったことを伝えると、子どもたちは一瞬とまどい、考え始めた。

児童Ａ「ちょっと待ってよ、和歌山のものばっかりっていうことやから、そっち方がええんとちがうん？ポイント高いのって、あかんのとちがうん？」

児童Ｂ「あっそうか。ポイントが高いってことは遠くから運んできてるってことやな。」

児童Ｃ「運ぶって事は傷ついたりする可能性高いやん」

児童Ａ「エコにも反するんと思うんよ。」

児童Ｂ「だって、ぼくたちが１学期に行った南部でも、バスで何時間もかかったやんか。この地図で見たら１㎝もないで。北海道から和歌山とかやったらむちゃ距離あるやん。」

児童Ａ「ぼくの家の近くのスーパーにね。“地産地消”コーナーってあるんよ。そこの野菜とかはね、近くで作られた野菜が売られてるんよ。」

児童　「知ってる～！！」

子どもたちが食材の産地にこだわるということの意味に気付き、“地産地消”という言葉が興味ある身近なものとなっていった。そして、“わかやまもん”調べがスタートした。

第3次　“わかやまもん”の実態調査　～地産地消のひみつをさぐれ！～(6)

“わかやまもん”調べのためにマリーナシティ内にある「黒潮市場＆きのくにフルーツ村」への校外学習に出かけた。そこで、和歌山にちなんだものを実際に目にし、どんなものが、どんな風に売られているのか等、販売者の方にインタビューしたり商品を見せていただいたりした。一方では、お客さんがどのような思いで、どんなことを考えて買おうとしているのか消費者の立場からのインタビューも行った。

また、給食での“地産地消”を支えてくれている紀伊の農家の山下さんにも学校へ来ていただいた。山下さんが野菜を届けてくれるときはその日の朝、とったものを運んでくれている。前日にスーパーで購入した野菜と比較すると、見た目にも、触った感じでも、香りでも、野菜の元気よさ、新鮮さの違いがすぐにわかった。とれたての新鮮な野菜のよさ、作った人の顔が見える安心感を実感できた。

１学期に校内でのびわPR活動を経験した子どもたち。“地産地消”をみんなに知ってほしい、自分たちが発信したいという声が出た。今回はもっと大きな視野をもって考えさせたいと、和歌山県の食品流通課で県外や外国への発信を仕事とされている宮本さんからお話を聞かせていただく機

会を設定した。子どもたちは大人の人が仕事として、和歌山の魅力をPRし、和歌山を活気づかせようとしていることを知り、自分たちも何かできないだろうかという思いを強くもつことになった。

児童A「調べてたら、千葉県では“千産千消”って名前をつけて、積極的に取り組んでいるみたいなんだけど、私たちも和歌山にちなんで、何か考えてみたらいいと思うんですけど。」

児童　「賛成！」「いいね。」

児童B「千葉やったらたまたま千（せん）という時が“ち”とも読めるからいいけど・・」

児童C「難しいなぁ」

児童D「“地産地消”の意味は、地域で生産、地域で消費だから、別に同じ読み方と違ってもいいんとちがうん？」

児童B、E「あ！和産和消（わさんわしょう）！」

児童A「あ～、なるほど。和歌山で生産されて和歌山で消費しようということになるね」

児童　「OK!　すごくいいと思う」

話し合いの結果、“和産和消”を地域の大学で行われている子ども祭りや、イベントに参加し『4B和産和消PRし隊』として、PR活動をこだわりをもって行うことができた。

4．地産地消から和産和消へ

“地産地消”を学んでいく中で、自分たちがこだわりはじめてつけた“和産和消”。言葉だけでなく、対象へのこだわりが感じられる取り組みとなったと感じている。

“4B和産和消PRし隊”をどのようにして行うのかを話し合う場面で秋カレー作りの際、ある男子児童が「りんごはやっぱり青森！」といって購入した場面を振り返った。

“和産和消”のよさだけでなく限界があること、他府県にもそれぞれの地産地消があり、こだわりをもっているということに気付いた。

児童A「例えば、和歌山だったら、梅干しが有名で、福岡県やったら明太子が有名。それぞれ自分の県の特産物を交換し合ったら、いいと思う。」

児童B「新鮮さとか考えたら“和産和消”が理想やけど、無理があるから、みんなで助け合っていけば、いいんと思うんよ。」

児童C「だって、りんごは青森とか寒いところが合ってるけど、みかんとかは和歌山とか愛媛とか、温かいところの方が作るのに合ってるやんか。だから、その場所に合ってるとか合ってないとかあると思うんよ。」

児童A「“和産和消”を大切にしたいけど、他の所の人にも知ってもらって和歌山のものをおいしいって思ってもらいたいと思うんよ。おばあちゃんは、いつも梅干しはやっぱと和歌山のがおいしいって言ってくれるんよ。」

等の意見が続き、地産地消のよさをわかりつつも、その限界にも気付き、それぞれの地域のよさ、特性を生かしたものを尊重し合い、大切にしていくことが大切だという話し合いになった。

また、その後大阪に住んでいる二人の子どもたちから、大阪（泉南）の特産物である「水なす」を紹介する場面があり、その子どもたちの声をきくことで、本当の“和産和消”を実感することにつながった。

5．成果と課題

体験の言語化を意識して授業を創っていく中で、子どもたちの総合（CHANGE）の学習に対する見方の変容が見られてきている。「友だちに自分の考えを伝えることができるようになってきたと思う」「自分の考えを伝えるって案外難しい。CHANGEの学習は楽しいけど大変だ」「和歌山のいいところ、もっとたくさんの人に知ってもらいたい。でも自分も知らないことが多かったから他の地域のことも調べていきたい。」等の思いをもつ子どもが増えてきている。このような子どもの声からは成果が感じられるものの、「答えがないから苦手」という意識が先行してしまっている子ども、CHANGE振り返りシート等を通じて意識の変容が感じにくい子どもも見られる。全体に浸透させるための手立てが今後の課題である。

参考文献

「子供を救う給食革命」新潮社
伏木　あつし　北山　敏和　著
「食育・食農教育のための実践テキスト」
野田　知子　著　　明治図書